

露地栽培モモ「さくひめ」は遮光二重袋を使用することで慣行の白一重袋より着色が向上する

露地栽培におけるモモ「さくひめ」は白一重袋と比較して遮光二重袋を使用することで、果実品質を損なうことなく着色向上が可能である

農業研究センター果樹研究所落葉果樹研究室（担当者：湯田健太）

研究のねらい

モモ「さくひめ」は、自発休眠覚醒に必要な低温積算時間が少なく、温暖化の影響を受けにくいうえ、既存の早生品種より大玉で高糖度な果実が生産可能である（農業研究成果情報 No. 840）。しかし、慣行の白一重袋では、従来の早生品種の主力である「日川白鳳」よりもやや着色しにくい傾向があるため、遮光二重袋による「さくひめ」での着色向上効果を明らかにする。

研究の成果

1. 遮光二重袋（図1）を使用した果実では、慣行の白一重袋（図2）と比較して果皮の着色が向上する（表1、図3）。
2. 1果重、果肉硬度に袋の種類による差はない。糖度は遮光二重袋がやや低い傾向がある（表1）。
3. 白一重袋を使用した果実では、果実表面のひび割れが見受けられたが（図5）、遮光二重袋を使用した果実では見られず、外観が優れる（図4）。

成果の活用面・留意点

1. 本試験は、露地栽培「さくひめ」11～12年生の立木仕立て（2本主枝開心自然形整枝）で実施した結果である。
2. 使用した袋は桃81（白一重袋、2.4円/枚）、ピーチ22号撥水ミニ大（遮光二重袋、5.2円/枚）である。
3. 仕上げ摘果後に遮光二重袋を被袋し、満開後75日前後に遮光部分の除袋を行い、すぐに反射資材（タイベックシート等）を必ず設置する。
4. 除袋時期が遅れると果実の着色が極端に悪くなるので、遅れないように特に注意する。
5. 枝が込みすぎていると反射資材の効果が薄れるため、樹冠下への日光透過率が2割程度になるよう新梢の捻枝、摘心、間引きを随時行う。

【具体的データ】 No. 1092（令和6年（2024年）6月）分類コード 02-10 熊本県農林水産部



図1 遮光二重袋



図4 遮光二重袋を使用した果実外観



図2 白一重袋



図5 白一重袋を使用した果実外観

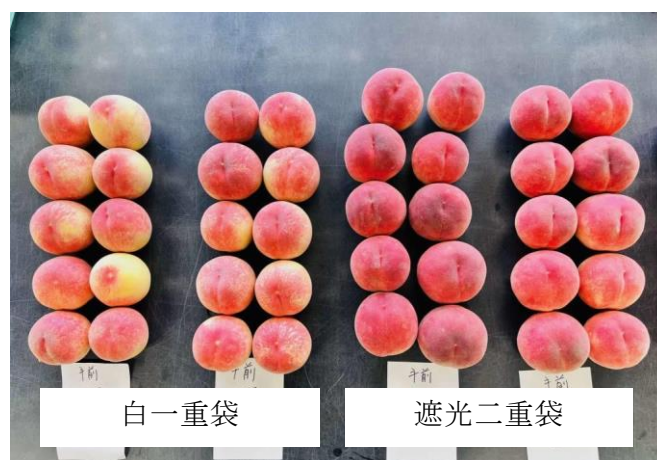


図3 袋の種類による果実着色への影響

表1 モモ「さくひめ」における果実袋の違いが果実品質に及ぼす影響

年度	処理区	1果重 (g)	果皮色 ^{注1)}	糖度 (Brix)	果肉硬度 (kg)
2022	遮光二重袋	282	4.9	14.5	2.1
	白一重袋	269	4.1	15.4	2.0
	有意性 ^{注2)}	n. s.	**	n. s.	n. s.
2023	遮光二重袋	267	5.0	14.2	1.9
	白一重袋	252	3.9	15.3	1.8
	有意性 ^{注2)}	n. s.	*	n. s.	n. s.

注1) 果皮色については、良5～不良1の5段階で評価。

注2) t検定により**は1%、*は5%水準で有意差あり。

注3) 収穫日 2022年：6/13、16、2023年：6/13、15